

# 安楽寺だより

平成29年 春 No.28号

弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな  
攝取不捨の利益にて 无上覚をばさとるなり

親鸞聖人

皆さん、過ごしやすい時期になってきました。しばらく寒さが続きましたが、お変わりありませんか、真夏になる前にじっくり体力を整えて下さい。

さて、心地よく過ごせる時期なんてほんの一時で、言っている間に、「暑い～」とうちわで扇がなくてはならない日々がやってきます。時の移り変わりは、はやいものです。

太陽に照らされると夏は「暑い」となりますが、冬はというと、あたり前ですが、暑いとは言わず、「温い」「暖かい」と言っているでしょう。太陽が光を変えているのではありません。同じ太陽の光であっても、当たっている方の立場で、感じ方は変わってしまいます。仏法も同じようで、仏さまの光に照らされても、その機縁の時期で、受け取り方も変わってしまいます。元気いっぱいの中には「そんな仏さまの話を聞いたって」と思ってしまいます。しかし大事な人がひとり去り、ふたり去り、次、私も去りゆく番だと、寂しさに涙する時、夏から冬へと変わります。

「浄土真宗のみ教え」という読本には「目の前に人生の深い闇が口を開け、不安のなかでたじろぐ時、阿弥陀如来の声が聞こえてくる。『弥陀の誓願は無明長夜のおおきなる灯なり』と親鸞聖人は仰せになります。」と灯は明るいところでは見えにくいものです。あたっていることすらわかりません。しかし真っ暗闇の中でひとりぼっちでたじろぐ

時、灯は、あかあかと私に光を照らしてくれていることに気づくことができます。その光に包まれて暗闇でも、まっすぐに歩いてゆくことができるのです。

釋 芳英